雜錄

ダヤーナンダの性行

羽溪了諦

上

印度が西洋文明の影響を受けて以來、その宗教界には頻々として眞摯な改革運動の勃興を見たが、就中印度の思想及び生活上に最も重大な影響を與へたものはスワーミ・ダヤーナンダ（Swāmi Dayānauda）の宗教運動である。彼の創設したアーリヤ教會（Ārya Samāj）は最近二十餘年間にパンジャーブ（Punjāb）並に合併洲に於て急速の發達を遂げ、且つ中央印度・孟買（Bombay）及びラジュプタナ（Rajputana）の各地にもその教勢を擴張して、今や最も尨大有力な教團となり、將來益々發展の潮勢を示してをる。實にダヤーナンダは近代印度の産出した最も偉大な宗教的天才であつて、その清徹な人格その剛毅な性格その愛國的熱情より觀れば、彼はわが國の日蓮上人に彷彿たるものがあり、その宗教改革の態度及び實蹟より觀れば、彼は慥かに印度教のルテル（Luther）と稱せらるべき偉聖である。故に今先づ彼の性行を紹介し、更に本誌次號に於て彼の思想を論述しようと思ふ。

中

西印度のカティヤワル（Kathiawar）に於けるモルヰ（Morvi）土王國に屬するタンガーラー（Tankā-

ra)といふ一市街に前世紀の初期アムバー・シャンガラ(Ambā Śaṅkara)と名くる富裕な婆羅門が住してゐた。この婆羅門を父として、西暦一八二四年に生れ出たのが卽ちダヤーナンダその人である。但し彼が父から與へられた姓名はムーラ・シャンガラ(Mūla Śaṅkara)といつた。彼の父は敬虔な印度教徒であつて、熱誠な濕婆(Śiva)信者であつたから、夙に彼に對して宗教的教育を施し、以て己が信仰を繼紹せしめんが爲に焦心努力ししてゐた。その結果、彼は十四歲に至つて吠陀(Veda)の大部分を暗誦し、梵語の文法に上達した。けれ共、彼はこの時その生涯の最初の精神的革命に遭遇して、偶像崇拜の宗教的價値に疑ひを挿むやうになり、漸々その行持に對して嫌厭の情を催すやうになつた。その後四年を經て、彼の愛する妹の頓死するや、彼は非常な悲痛恐愕の念に襲はれて、爾來專ら生死問題の解決に思惟を凝らし、如何にも

して眞正解脫の道に入りたいといふ强烈な宗教的要求に驅られて、益々古代聖典の研究に努力した。而して斯る大願を成就するには婆羅門の神聖な宗教生活に身を委ねて、一切の世俗的繫累を避けねばならないと決心して、西暦一八四六年二十一歲の時兩親より結婚を迫らるゝや、彼は遂に家を逸れ出で、諸國周遊の途に就いた。

この周遊中、彼は幾多の學僧に就いて教導を受けた。彼は最初ブラフマーナンダ(Brahmānanda)といふ學僧に遇ひ、その教化に依つて個人の靈と神との融合一致を力說する吠擅多(Vedānta)教義の眞理を確信するに至つたが、その後之を放棄し、二年間良師を覓めながら遍歷してゐた。西暦一八四八年彼はネルブッダ(Nerbudda)河岸のチャーノダ・カンヤーリ(Chānoda Kanyāli)に達し、瑜伽(Yoga)學僧及び吠擅多學僧の數團に接した。彼はこの時自分も學僧となつて、族籍も家庭も妻子も財產も

その他一切の束縛を脱却せる隱遁生活を營まんと欲した。蓋し一度公認の學僧教團に入つた以上は兩親と雖も最早結婚を强ひることが出來ないからである。實際彼の兩親は彼の家出以來彼を探索することに苦心してゐたのであつて、既に一度彼は父に捕へられたのであるが、再び逸れたのである。仍つて彼は遂にサラスヴティー(Sarasvati)教團に屬する有名なパラマーナンダ(Paramānanda)といふ學僧に入團を乞ふた。最初彼は之を拒絶したけれ共、後その懇請を容れて之を許可し、彼にダヤーナンダといふ名を與へた。こゝに於て彼はサラスヴティー教團の一員となつたから、爾來彼はサラスヴティー・ダヤーナンダとして知られ、彼自らも最後まで何人にもその本名を告げなかつた。故に世人は彼が以前のムーラ・シャンカラであることを知らず、又彼の家族も其後彼に關して何事も知らなかつたのである。

これより八年間は彼諸方を遍歷して、信賴するに足る瑜伽師を索めてゐた。彼のものした自叙傳(Satyarth Prakash. tr. by Durga Prasad. Introd.)には何故に彼が斯く熱心に瑜伽法を學ばんと志したのであるかを陳べてゐないが、惟ふに彼は之を以てその本願とせる解脱の境に達するに適當な方便と考へてゐたからであるらしい。

斯くの如く彼は多年間廣く印度各地を周遊して良師を覓めたけれども、いづれも彼の精神に滿足を與へなかつた。そこで彼は殆んど絶望の淵に沈まんとしたのであるが、幸にも西曆一八六〇年遂にマツラー(Mathuā)に於てパーヌィニ(Pāṇini)の文法學者として大權威を有してゐたキラヂャーナンダ(Virajānanda)に參ずることを得た。ダヤーナンダは二年有半彼の弟子となつて、既にその心中に萠してゐたアーリヤ教會の根本信條の芽を培養せられたのである。彼は專ら古代聖典の權威

を確信して、近代の梵語聖典は一切無價値なものとして排斥した。故にダヤーナンダも彼の敎を奉じて總ての近代書籍をヂュムナ（Jumna）河に投じて、初めてその弟子たることを允されたのである。彼は盲目學者であつたれ共、甚だ激怒し易い性質の人であつて、折々彼の弟子に體罰を加へた。或日彼は杖を以て力强くダヤーナンダを亂打して、殆んど死に至らしめんとしたことさへあつた。併し、ダヤーナンダは最も深く彼の感化に浴し、彼に就てパーヌィニの文典及びパタニュヂャリ（Patañjali）のものしたその注釋書を讀み、尙また吠檀多經（Vedānta-sūtra）及びその他の多くの書を研覈したといふことであるが、吠檀多經の外如何なる書を學修したかは判らない。兎に角、ダヤーナンダは彼の敎訓に基いて其の根本主義を確立したのである。西曆一八六三年五月師の允可を得て、彼は師と分れて再び遍歷を始めた。而して今や彼は自ら學者的態度を取つて、常に會話の際にもその本國の土語たるヒンディー（Hindi）を用ゐないで、梵語を用ゐてゐた。けれ共、彼は未だ決して自ら敎師と考へず、依然として求道者的態度を保つてゐた。彼が再び遍歷の途に就いた時にはなほ濕婆信者であつて、外形にその特徵を表示してゐたが、遍歷を續けてをる間に其の思想上に變化を來して、その身に著けてゐた特徵を全く取り棄て、その後は唯一最高の神を崇拜し、濕婆の如きは只最高神の有する多くの名稱中の一に過ぎないと信ずるに至つた。是れ實に彼の生涯に於ける第二の精神的革命であつて、時正に西曆一八六六年であつた。

更に其の後二年を經て彼の精神上に第三の變革が生じた。彼は今やその宗敎的觀念を宣布することを以て己が使命であると感ずるに至つたらしい。それでダヤーナンダの公的生活は此の時から

始つたと言つて然るべきである。併し、彼はその信仰宣傳の試みに於て最初は多少失敗を繰返したと傳へられてをる。彼は最初梵語を以て學者達にその信仰を宣傳しようと企てた。是れ蓋し學者をして彼の思想の眞理なることを確信せしめたならば、彼等は全國土を通じて其の光明を照被せしむるに違ひないと信じたからである。さりながら、之等舊弊の保守主義者は假令如何ほど彼等の觀念の迷謬なることを論證せられても、彼等は依然として同じ見解を固執してゐたから、彼は絶望して此の方法を廢止した。次に彼は基督教傳道師の常に採用する布教法の一たる教育に依つて、彼の信仰を弘布せんと試みた。彼は幸にして有福な後援者を見出して、その人々の寄附金に依つて數個の學校を經營した。それ等の學校に於ける科目は只古代の梵語文書に限定せられた學生は皆自己の思想の宣傳者となるに違ひないといふ希望を繫いでゐた。かゝる豫期を以て之等の學校が開かれて暫し繼續してゐた。が併し、學者は俸給を貰つて教師となることを好んだけれ共、彼等は彼の新思想を教授せなかつたが爲、この事業も亦全く無效に終つた。そこで彼は最後に講演及び著書に依つて直接民衆に向つて自己の新信仰を鼓吹せんと決心した。彼は直ちに數種の著書を出版して、市街から市街へと巡教を續けて行つた。ところが、この方法は大いに成効して到る處貴賤貧富の別なく多數の聽衆を集めることが出來た。かく群衆に對して說教を試みると同時に、彼は個人に對しても頻りに談話を試みたが、婦人と對話することだけは堅く拒絶した。而して彼は機會さへあれば學者と論議を闘はし、特に到る處で公然學者と討論する場合には、偶像崇拜が吠陀の眞義に叛ける迷信なることを證明することに努めてゐた。彼の弟子等は之等の討論に於て常に彼が勝者の地位を占めてゐた

ことを揚言してをる。而して彼と論爭した人々は皆彼が猛烈であつて、大音聲を有し、威壓力を具へてをることを告白した。要するに、彼は强壓的容貌と異常な音聲とを有せる偉大にして權威ある人物であつた。

西暦一八七二年の末葉、彼はカルカッタ(Calcutta)に赴いて、講演談話及び討論を試みながら、この地に於て四ケ月を消した。その間に彼は梵教會(Brāhma Samāj)の一派たる印度梵教會を統率してゐたケシャブ・チャンドラ・セン(Keshab Chandra Sen)の感化を受けて、その傳道の方法を變更するに至つた。從來彼は極めて簡單な衣服を纏ふてゐたに過ぎなかつたが、この時より彼はケシャブ及び他の梵教會の總理等の着用してゐた一定の制服を纏ひ始め、又彼等總理がベンガル語(Bengali)で談話することに依つて大感化を及ぼしてをるのを見て、彼はこの時より公開講演に於ては梵語を用ゐることを止めて、土語ヒンディーを用ゐ始めた。

彼は北印度を通じて廣く布教を試みたから、彼の名聲及び感化は益々その範圍を擴め、愈々その根柢を深くした。西暦一八七四年の末期彼は孟買に赴き、印度教徒團及びプラールタナー教會(Prārthanā Samāj)と密に接近した。而して彼はこの市に於て異常な成効を收めたと見えて、その翌年早々この市に歸り來つてアーリヤ教會設立の大計畫を發表した。その際、プラールタナー教會員はダヤーナンダと合同することの出來ることを望んだけれ共、合同するには兩者信條の相違が餘りに甚しかつた。

西暦一八七七年一月元旦デルヒ(Delhi)に於て總督リットン(Lytton)卿に依つて行はれた莊嚴な引見式に於てヴィクトリア(Victoria)女皇の印度女帝たることが宣布せられた。ダヤーナンダも一土

王の賓客として其の式場に臨んだのであるが、其の際彼はラホール（Lahore）から來つた印度教徒に遇ひ、彼等よりパンヂャーブに來るやうにと懇切な招待を受けた。仍つて、彼はその後間もなくルドヒアナ（Ludhiana）及びラホールを訪れた。而して彼はラホール於て大成効を得たが爲、此の地に設けれたアーリヤ教會は頗る迅速に孟買に於けるそれを凌駕するに至り、遂に此の地は彼の宗教運動の本陣となつた。

ダヤーナンダはなほ六年間北印度を遍く巡遊して着實にその教會を擴張することに從事した。この間に吾人の注意すべき二つの事件がある。まづ初めにはダヤーナンダが西暦一八七五年紐育に於て創立せられた神智教會(Theosophical Society)と結合した事件である。一八七八年にその教會の創立者たるオルコット（Olcott）大佐とブラヴトスキ（Blavatsky）夫人とが書をダヤーナンダに送り、兩教會の目的が同一であるといふ理由に基いて、兩教會の運動を結合せんことを提議した。而してダヤーナンダはこの申込みを容れたから、神智教會の總理は一八七九年一月に印度へ渡來した。この奇しき合同は一八八一年まで繼續したが、其の年に破れてしまつた。次に他の事件は彼の行ふた政略である。彼は專ら印度教徒をして彼が古代の信仰であると確信せる所のものに歸入せしめんと欲し、而も彼等を煽動して基督教並に回々教に對して劇烈な反抗の態度を取らしめた。一八七四年に出版せられた彼の著 Styārth Prakāsh の初版に於ては、一定の條件の下で牛肉を食することを認許したにも拘らず、その再版に於ては之が咎められてをる。而して一八八二年に至つて、彼は牝牛保護會(Gaurakshini Sabhā)を設立し、同時に之に關する Gokarunanidhi といふ著者を出版した。之等處置のは全く基督教徒並に回々教徒が古來印度教

徒によつて神聖視せられた牛を殺すの理由を以て、印度教徒をして彼等の宗教に對して反感を興さしめんとする目的に外ならないことは炳かである。實にダーヤナンダの傳導的努力の目的は要するに一方に於ては基督教の印度侵入を禦ぎ、他方に於ては神聖な吠陀によつて宣託せられた印度の傳承的思想を護るに在つたのである。故にラホールのグリスウォルド(Grijswold)博士はダヤーナンダの宗教的目的を以て「印度人の爲め印度宗教」を建設せんとするに在りとなし、この宗教的目的を完成する爲めには、印度の宗教は吠陀に復歸することに依つて改革せられ純化せられると同時に回々教や基督教やの如き外來宗教は絶滅せられねばならないから、彼は印度固有宗教の改革と外來宗教の絶滅とを企てたのであると言ふてをる(Indian Evangelical Reviw. January, 1892)これは實に眞相に觸れた見解であるらしい。併し彼は他方に於てダヤーナンダが常に絶叫してゐた「吠陀に還れといふ箴言中には印度人の爲の印度」といふ箴言が含まれてゐて、兩者を結合すれば印度の宗教並に印度の主權は印度人に屬すべきものであるといふ主義が生じて來ると論じ、如何にもダヤーナンダの宗教運動の裏面には印度獨立を目的とする政治運動が潜んで居るやうに仄してをるが、それは聊か穿ちすぎた偏見であつて、彼の教會は最初から政治と何等關係のないことを斷言してをる。現に一昨年ラヂパト・ライ(Rajpat Rai)に依つて公にせられたこの教會に關する著書中にもアーリヤ教會政治的若しくは反英的運動を目的とするものでないことが辯明せられてをる(The Arga Samāj. pp. 155—8.)。

ダヤーナンダは彼の宗教運動が未だ大發展を遂げない先きに彼は歿してしまつたが、その後彼の教會は迅速な大擴張を見るに至つた。彼は五十九

歳を一生涯として西暦一八八三年十月三十日に遷化したのである。

以上叙述した所に基いて判斷すれば、ダヤーナンダは性來知識慾が頗る熾んであつて、專ら力を眞理の探求に致し、恒に理想を逐ふて片時も之を離れることなく、剛毅精進にして志願倦むことなき偉聖であつたらしい。

下

最後にダヤーナンダの主著に就て一言しよう。

（一） Satyārth Prakāsh　本書は結婚・出産・教育・教團・政治・神・吠陀・世界・人間・解脱及び食物に關する彼の教說を表示し、又印度に於ける種々の信條を面白く詳述して、それ等の信條に對する批評を附加したものである。而して、之はヒンディを以て書かれてをる。

（二） Veda Bhāshya　本書は梵語で記された吠陀の注釋であつて、未だ完結してゐないが、然も夜柔吠陀（Yajurveda）全部と梨俱吠陀（Ṛgveda）の大部分とを包括してをる。

（三） Ṛgvedādi Bhāshya Bhūmikā　本書は彼吠陀注釋の緒論であつて、一部は梵語で記され、一部はヒンディで書かれをる。而して之は所有現存の注釋を誤謬として排擊し、自家の主張を說明せる辯駁書である。

之等三種の著述中、彼の思想を窺ふに最も適當なものは最初の著書である。殊にその結尾には類別的順序によつて彼の信仰が概括せられ、之に簡單な緒言が添附せられをる。之等の書中に詮表せられてをる彼の思想は本誌次號に於て論述しよう。